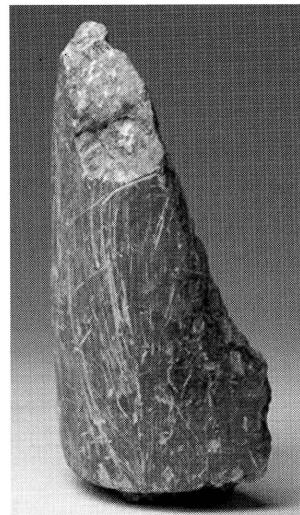


三十三、若杉山のすべる石

三郡山帯の西端に位置する若杉山は、古くから宝満山系山伏の修験の場として知られています。そこには、修験僧が植えたと思われる樹齢数百年の大スギ群が密生し、その下にはアオキが群生しています。その鬱蒼とした森林の中を通る登山道を歩くと、途中銀色で光沢のある石が目に付きます。手にとつてみると、すべすべした油質の軟らかい感触があり、爪で簡単に傷をつけることができます。これが滑石と呼ばれる鉱物で、一番軟らかい石（硬度一）です。温石といえまなんご存じかもしません。

若杉山は地質的には三郡變成帯に属し、蛇紋岩類や三郡變成岩が多く、また山頂付近には滑石の露頭が見られます。太祖神社の上宮裏の太祖神社の大スギ（福岡県指定天然記念物）の脇を抜けて、奥の院へ向かう参道の途中に、善人のみ通り抜けることができ



(写真②)

や場所は様々です。さらに乙犬の隈遺跡の古墳内からも滑石製の白玉や勾玉など古代の装飾品が発見されました。

また、近年城戸で確認されたものに、中世石鍋の工房跡（写真③）があります。この場所は、平家落人伝説や篠栗四国霊場の祖である慈忍尼僧が修行をした滝周辺であり、昔から靈験ある地であるとされています。中世には軟らかい石の性質を利用して仏像や墓石としても加工されています。

近世になると、隣の須恵町にはこの滑石の粉を軟



(写真③)

膏に混ぜた「止明膏」と呼ばれる膏薬目薬が登場します。そのため須恵には眼科が集中していたようです。近現代では、陶磁器の釉薬、農薬の増量剤や化粧品のパウダーとして、さらには無味無臭で、無毒の特性を活かして、薬剤・ビスケット・チューインガムとしても使用されました。良く滑るダンスホールにはこの滑石の粉が撒かれていたそうです。

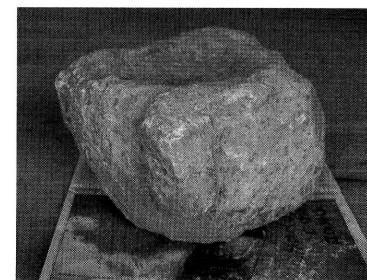
滑石の特徴は、

- 一、削ると非常に細かい粒子になり、よく滑る。
- 二、温めると冷めにくく。
- 三、軟らかいので加工がしやすい。
- 四、無味無臭で無毒である。
- 五、光沢があり油質である。

以上のように滑石は、縄文時代から現代まで長い間人々の暮らしに密着したものに加工し利用されてきました。この他にもみなさんがご存じの滑石（温石）の使用方法が脳裏に浮かんできていますか。

さると言われる大岩が剥離した場所（挿み岩）があります。そこを無事通り抜けることができると、足元には銀色のツルツルした滑石の露頭が五、六個ほど続きます。また、大スギ群の間や登山道にも滑石の原石やその石で作られた石鍋の未製品（写真①）や破片を見つけることができます。

若杉山を中心とした篠栗町内の遺跡には、滑石で作られた遺物が数多く発見されています。若杉（むかいの）山経塚遺跡（向ノ山採石場）からは中世の滑石製の経筒（写真②）、若杉肥前谷遺跡（カブトの森公園）では石戈（せつか）弥生時代・石鍋（中世）、塚本（さかと）高田遺跡（国道二一〇一号线）では石鍋（中世）・丸玉や牙玉（縄文時代）、勢門小近くの奥小路遺跡では石鍋（中世）と、時代



(写真①)